

1. 「親になる」ことを支援する妊娠期からの助産ケアに関する研究

2. 女性と助産師との関係に関する現象学的研究

看護学科（母性看護学）
看護学研究科（助産学）

おお だ ひろ み
大和田 裕美

● 連絡先 TEL：054-202-2913
E-Mail：h-owada@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

妊娠期からの親支援，子育て支援，
女性－助産師関係，現象学的研究



【テーマ1】子育て支援活動を行うNPOとともに、妊娠期から子育て期にある方を対象とした講座を開催しながら、「親になる」ことへの支援について研究しています。中でも、パートナーが妊娠期にある男性に対する支援は、母親となる女性をサポートするために必要な知識・技術の提供を目的としたものが多く、男性自身が「親になる」ことへの支援が十分になされているとは言えません。そこで、パートナーが妊娠期にある男性を母親のサポーターではなく、親になっていく存在ととらえた効果的な助産ケア方法の開発に向けて研究しています。

【テーマ2】女性と助産師との関係は、助産ケアを支えるものでありながら、当の女性や助産師にとってはっきりと自覚されないままに経験されています。そこで、女性と助産師との関係がどのようにして成り立ち、営まれているのかを現象学を手がかりに研究しています。

☆☆☆ **ハッピーパパ** ☆☆☆
マタニティ講座 ☆☆☆

～「家族を笑顔にするパパになる」～

ママは母性学級があるのに
パパは父親学級がない！
そんな声から生まれた
パパ中心・パパ目線の講座です

こんなこと
話しましょう

| | |
|--------------------|---------------------|
| ☆☆ パパとママのすれ違い | ☆☆ パパは具体的に何をしたらいいの？ |
| ☆☆ 「赤ちゃん」ってどんな生き物？ | ☆☆ 知っておきたい制度・支援 |
| ☆☆ ママにとっての出産・母乳育児 | ☆☆ パートナーとのスキンシップ |

子育て中の親のプログラム「Nobody's Perfect（完璧な親はいません）」の
ファシリテーターで助産師のグループが講座の進行役として、パパを応援します！

パートナーが妊娠中の方などなたでもご参加いただけます

- ＊ 初産・経産は問いません。
- ＊ パパだけ参加大歓迎！
- ＊ ママの参加もできます

講座に参加したパパたちの声

親になることについて、
不安や思いを共有できた

パパ同士の交流の場は
少ないので、意見交換の
いい機会だった

パパとママの思いの違いを
知り、夫婦でたくさん話して
いきたいと思えた

親になる自覚を持てた

アピール ポイント

カナダ発の親支援プログラム「Nobody's Perfect」認定ファシリテーターである助産師として、パパ向けマタニティ講座や未就学児の親を対象とした親支援講座を開催しています。

1. 看護技術の効果検証

2. 排便パターン分類フローチャートの開発

看護学科（基礎看護学）
看護学研究科（看護技術学）

かとう きょうり
加藤 京里

●連絡先 TEL：054-202-2918
E-Mail：k.kato@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

看護技術，温罨法，冷罨法，排便



闘病中の患者は、不安や痛みに伴う交感神経活動の亢進によって、食事・睡眠・排泄などの基本的な日常生活行動をいつも通りに行うことが困難になります。看護師が行う温熱を用いたケアは、“温かさ”や“気持ちよさ”のみならず、患者がその人らしい生活を取り戻す、つまり食欲増進、睡眠の促進、便秘の改善などの効果が期待されています。

ストレス軽減の効果：

健康な成人を対象に温罨法*を実施した実験（江上2001，加藤2010）では、腰背部温罨法は自律神経のバランスを整えることが示唆されました。

リラックス効果：

閉経後の女性を対象に40℃と60℃で温罨法を実施した実験（加藤2011）では、40℃の後頸部温罨法は、交感神経の上昇を抑え副交感神経を亢進させることが示唆されました。

食欲・睡眠の促進効果：

入院患者を対象に後頸部温罨法を就寝前に実施した研究（加藤2012）では、患者から「痛みを忘れる」「食欲増進」などの語りがあり、睡眠調査票得点が上昇しました。

便秘症状緩和の効果：

排便困難を客観的指標から評価する「排便パターン分類フローチャート」の開発のため、研究チームで調査（加藤ほか2012，菱沼ほか2021）を継続しています。「便秘症状緩和のための温罨法 Q&A」は日本看護技術学会の HP で閲覧できます（<https://jsnas.jp/guideline/>）。

*注)温罨法：湿熱や乾熱による刺激を、主に皮膚表層に対して与える看護を意味します。以上で提示した研究では、蒸しタオルや市販の蒸気温熱シートを温罨法として使用しました。

アピールポイント

身体を“温める・冷やす”効果、ならびに“排便状況”の調査、に関心をお持ちの施設、企業のご連絡をお待ちします。

自己導尿に関するYouTube®動画の検討

看護学科（老年看護学）

さとう りの
佐藤 理乃

●連絡先 TEL：054-202-2658
E-Mail：rino.sato@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

間欠導尿，尿排出機能障害，排尿ケア



近年では、患者が健康に関する知識を得ることを目的にSNSを利用することが増えています。SNSの一つにYouTube®は存在し、医学的情報が発信されていますが、基準と矛盾する、誤解を招く情報が含まれている可能性もあります。これまでに、本邦において自己導尿動画について検証された研究はなく、更には自己導尿手技に関する学会主導のガイドラインや動画発信は存在しないため、正しい知識と矛盾する情報が伝わる可能性が高い事が考えられます。

我々の研究チームでは2020年5月までにアップロードされた自己導尿に関するYouTube®動画の実態を調査し、その特徴とニーズを明らかにしてきました。今後、2020年5月以降の動画を含め再度調査し、動画の特徴と患者のニーズを明らかにし、ニーズに沿った自己導尿の情報提供や、自己導尿指導の動画作成に寄与していきたいと考えています。

研究の背景


自己導尿患者数、56,433人
(厚生労働省、2019)


患者が自己導尿の手技を習得した
あと、医療者による評価がされてい
ない現状(Hagen, 2014)


SNSの動画はアクセスが容易である
ため、教育や動機付けを促進する
ための患者にとって重要なツールで
ある(McMullan, 2006)

佐藤理乃. 第29回日本排尿機能学会「多職種協働時代におけるCICのベストプラクティスを探る」2022

アピール ポイント

患者さんが安全に正しい知識をもって間欠自己導尿を継続出来るための支援を、多職種で検討しています。一人でも多くの方々とこの問題を検討していきたいと考えております。

日本人女性の自死の社会的要因

さとう るみ
看護学科（公衆衛生看護学） 佐藤 瑠美

- 連絡先 TEL：054-202-2657
E-Mail：ru.sato@u-shizuoka-ken.ac.jp
- ホームページ <https://site-1615963-550-1723.mystrikingly.com/>

キーワード

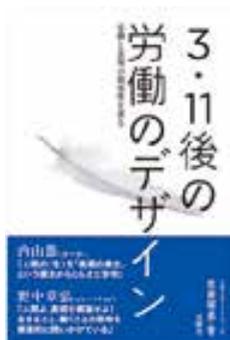
労働，自死，地域社会，マルクス



近年の気候変動による影響や新興感染症流行、外交的緊張の高まりを背景に人間の安全保障の問題は、全ての人びとの高い関心ごとといえるでしょう。これまで、「働くこと」の意味を再考すること、「地域社会とつながること」は伝統的な地域社会の在り方の視点から現代の課題について考えてきました。最近では、コロナ禍で増加に反転した女性の自死の急増を社会の脆弱性の顕れと捉え、その要因の一端を解明することで、人々の安寧な社会づくりに貢献したいと考えています。

著書

- 『3・11後の労働のデザイン—表現と労働の関係性を探る—（ディスカヴァー ebook 選書）
ディスカヴァー・トゥエンティワン、2022 / 双風舎、2014（単著）
- 『新たなコミュニティの創造—グローバル化社会のなかで—』、時潮社、2018（単著）
- 『地域包括支援・総合相談事例集』、第一法規、2007（共著）



アピールポイント

2014年に刊行された『3・11後の労働のデザイン—表現と労働の関係性を探る—』が、2022年に“ディスカヴァー ebook 選書”として、出版社ディスカヴァー・トゥエンティワンより出版されました。

コミュニケーション・スキルに関する研究

すが はら きよ こ
看護学科（基礎看護学） **管原 清子**

●連絡先 TEL：054-202-2927
E-Mail：sugahara@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード コミュニケーション、コミュニケーション・スキル、アサーション



コミュニケーションは、社会の中で他者との関係を形成、維持するために必要なものであり、社会生活を営むために欠かせないものです。このコミュニケーションを円滑に行うために必要となるのが、コミュニケーション・スキルです。特に、看護の対象を理解し、対象との関係を構築しながら看護援助を行う看護師にとって、コミュニケーション・スキルは非常に重要なものです。

このコミュニケーション・スキルを学生時代にどう育てるのは、看護基礎教育に携わるものとして重要課題であります。現在、入学時からの卒業時までのコミュニケーション・スキルの特徴や成長、学年・経験による差などを調査しています。一部調査結果を提示いたします。

看護学部1年生と2年生のコミュニケーション・スキルの特徴

1年生と2年生の比較：ENDCOREs

| | | 1年生 | | 2年生 | |
|----------------------|------|-----|-----|-----|-----|
| | | 平均 | SD | 平均 | SD |
| 管理系 コミュニケーション・スキル | 自己統制 | 4.8 | 0.7 | 4.8 | 0.7 |
| | 関係調整 | 5.0 | 0.8 | 4.9 | 0.8 |
| 表出系 コミュニケーション・スキル | 表現力 | 4.1 | 0.8 | 4.1 | 1.0 |
| | 自己主張 | 3.9 | 0.9 | 3.9 | 1.0 |
| 反応系 コミュニケーション・スキル | 他者受容 | 5.5 | 0.9 | 5.5 | 0.9 |
| | 解決力 | 5.1 | 0.8 | 5.0 | 0.8 |

アピールポイント

看護の分野だけでなく広く色々な分野におけるコミュニケーション・スキルに興味があります。コミュニケーション・スキル向上にむけて研究と一緒に取り組んでくださる方大歓迎です。職場や学校におけるコミュニケーション・スキルの測定や評価に協力できます。コミュニケーションに関する講師依頼もご相談ください。

脳卒中患者の夜間の呼吸状態安定化に向けた研究

看護学科（成人看護学）

すずき あやみ
鈴木 郁美

●連絡先 TEL：054-202-2943

キーワード

脳卒中, 脳血管障害, 睡眠呼吸障害, 再発予防,
非接触呼吸センサ

脳卒中患者は全国に112万人いると言われ再発も少なくありません。脳卒中の再発は初回に比べ重症化しやすく、脳卒中の再発予防への介入は看護の重要な項目として位置づけられています。脳卒中患者の看護に10年以上従事し、服薬自己管理や生活習慣病の改善に向けた取り組みなど、さまざまな再発予防に対する取り組みをおこなってきましたが、十分な結果であると言えず対応に苦慮してきました。

近年、夜間における低呼吸や無呼吸は、低酸素血症に伴う血圧の上昇が脳卒中の再発因子として指摘されています。臨床において患者の夜間の呼吸状態の把握は目視で観察する困難さに加え夜間の看護師のマンパワー不足から容易ではなく、脳卒中患者の夜間の呼吸状態の安定化に向けて、どのような看護介入が有効であるか十分に検討されていません。そこで、脳卒中患者の呼吸状態の安定化に向けた看護介入の有効性を検討する取り組みとして、夜間の呼吸状態を把握できるセンサを開発・有用性を確認する研究を行っています。

脳卒中患者の夜間の呼吸障害は急性期において指摘されていますが、慢性期では明らかとなっていません。そこで非接触・非拘束で体動から1回の呼吸数・換気量を測定できる呼吸センサを用い脳卒中患者の夜間の呼吸状態を測定したところ、慢性期の脳卒中患者においても問題を生じていることが明らかとなりました。さらに検討を重ね、夜間の呼吸状態の安定化に向けた脳卒中患者の看護に貢献できる取り組みを続けていきたいと考えています。

呼吸に問題のない安定している体動



無呼吸が生じた体動



呼吸に問題のある体動量の変化

療養ベッドのマットレスの下にセンサを設置し、体動量の変化から呼吸状態が把握できる。慢性期の脳卒中患者においても無呼吸が生じていた。

アピール
ポイント

脳卒中患者の看護やリハビリテーション看護に関する研究に取り組んでいます。

学校メンタルヘルスリテラシー教育プログラムに関する研究

看護学科（精神看護学）
看護学研究科（精神保健看護学）

たかむら そういち
篁 宗一

● 連絡先 TEL：054-202-2649（直通）
E-Mail：takamura@u-shizuoka-ken.ac.jp

看護学部

キーワード 学校メンタルヘルス、メンタルヘルスリテラシー、教育、早期介入、予防、思春期、こころの健康、こころの問題、精神疾患



近年、メンタルヘルスによる影響が社会的に大きいことが明らかになり、2022年4月から「精神疾患の予防と回復」の授業が高等学校で開始されました。

思春期にあたる中学生や高校生の時期は、ちょうど精神障がい的好発期にあたり、「こころの病気」の起きる可能性は、「児童期」からストレスや悩みが多くなる「思春期」にかけて大きくなってきます。

思春期の生徒を支援する教育現場では、本来、一次予防に焦点を当てて、メンタルヘルスに関する知識の増進をはかる必要があります。

教育の場において、メンタルヘルスリテラシー教育を体系的に実施することは、精神疾患に対する正しい知識をつけ、精神的な不調が発生した場合に適切に援助を求めることができるという精神疾患の予防・早期発見につながり、大きな意義があるといえます。

私たちは、思春期に差し掛かった中学生を対象に、効果が上がる学校メンタルヘルスリテラシー教育プログラムを開発し、その有効性と成果を明らかにしてきました。

同時に、効果的なメンタルヘルスリテラシー教育プログラムを中学校・高等学校、さらには小学校などと連携して、実施・普及する取り組みを進めてきました。



ABEMA Prime 2022年9月1日放送「心の病気どう教育？メンタルヘルスリテラシーを学ぶ」に出演した。

アピールポイント

不登校やそれにつらなるひきこもりの問題、またいわゆる拒食症・過食症とよばれる「摂食障害」の増加など、思春期における「こころの健康＝メンタルヘルス」の問題に直面する先生方も多いのではないのでしょうか。思春期の子どもたちが自らこころの健康について学び、障害者との交流も含めて幅広く人間形成に寄与できるような教育プログラムになっています。

非接触型デバイスによる呼吸測定とアセスメントの向上に関する研究



看護学科（成人看護学）

なか おか まさ あき

中岡 正昭

● 連絡先 TEL：054-202-2947

キーワード

看護，救急，集中治療，急性期，呼吸回数，換気測定

救急医療や急性期医療に特化した問題や課題に対する研究をしています。看護師として10年以上の経験と急性・重症専門看護師として救急医療・急性期医療に従事した経験をもとに、現在発生している医療問題に焦点を当てた研究を行なっています。

昨年度から新型コロナウイルス感染症の渦により医療資源や医療従事者の疲弊が叫ばれています。病院で入院している患者さんを始め、医療施設以外での療養を余儀なくされている患者さんも身体状態を把握するためのバイタルサインを測定することは必須でありながら、医療者の負担は大きくなっています。特に新型コロナウイルス感染症は呼吸症状にあり、呼吸状態のアセスメントに必要な酸素化と換気状況の把握は必須となる。そのため酸素化と換気状況を把握するために非接触かつ非侵襲であり、簡易的にモニタリングを可能とするデバイスが必要であると考えました。この開発したデバイスの妥当性・有用性を確認し、臨床にて看護師がアセスメントできるか検討を行なっていきたいと考えています。

その他の研究では近年、筋電気刺激（EMS）が筋力低下に効果を示すとの報告がされています。集中治療室に入室する急性期にある患者に対しても、EMSを用いることでより効果的なリハビリテーションができるか検討しています。

アピールポイント

救急医療や急性期医療に特化した問題や課題に対する研究をしています。

教員の助産師力を地域に発信！



看護学科（母性看護学）
看護学研究科（助産学）

なか がわ ゆ か
中川 有加

● 連絡先 TEL：054-202-2949

キーワード Women-centered Care, プレコンセプションケア, 子育て支援, 女性の Quality of life の向上, 性教育, 地域支援, 更年期ケア, 看護師・助産師教育



助産師は、妊娠・分娩・産褥にのみ関与する専門職ではなく、女性の一生に関わる職業である。近年では、女性の健康に対する社会的・文化的・政治的な影響を重視し、女性の総合的な Well-being を目標とする女性を中心としたケア（以下 Women centered care とする）を基礎概念として教育が進められている。女性が身体的、精神的、および社会的な健康を高めていくために Women-centered Care の「尊重」、「安全」、「意思決定」、「エンパワー」という原則に則り、助産師として臨床経験豊富な母性看護学領域の教員が、それぞれの得意分野を活かして地域の女性を支援する試みを進めていく。その試みとして、「Women's サロン in 県大」を継続的に運営していく。看護学部として、地域との断続的な交流が必要である。教員が交代制で女性のライフステージにおける健康問題に着目し、プレコンセプションケア、妊産褥婦および子育て支援、DV や虐待予防などのイベントや個別相談を実施していくことで、静岡県在住の女性が安心して生活できることにつながると考える。また、看護学部の4年生や助産学分野の大学院生も参加することで地域に貢献できる医療従事者の学びの機会とする。昨今の現状から、オンラインでの実施も考えている。今後は、他領域との教員と協働でサロンの運営を検討していく。



学生による性教育の実際



アピールポイント

地域での女性の健康相談、子育て支援の取り組み、プレコンセプションケアの啓発活動、性教育の実施などご要望に対応していきたい。経験豊富な教員の助産師力で地域貢献していきたいと考えています。

更年期女性の更年期の捉え方および更年期の健康に関する研究

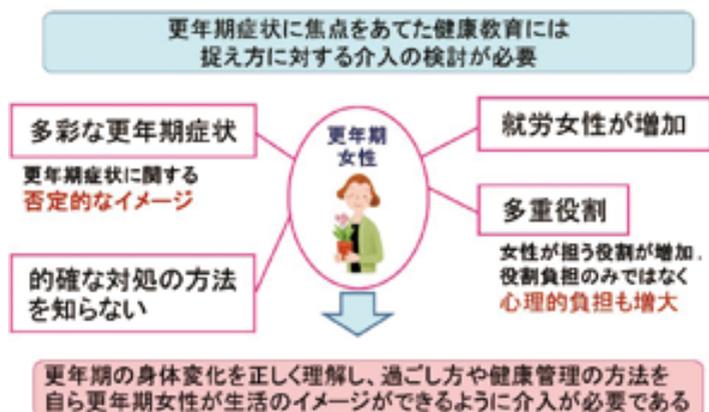
看護学科（母性看護学）
看護学研究科（助産学）なが たに み ほ
永谷 実穂●連絡先 TEL：054-202-2668
E-Mail：nagatani@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

更年期症状, 就労更年期女性, 健康教育,
更年期の捉え方

女性のライフサイクルにおいて、ホルモン環境が変化する時期があり特に更年期の女性はホルモンバランスの崩れがもたらす身体の症状が大きく出現する時期です。これらのことは、以前よりも周知されてきていますが、ほとんどの女性は初潮教育の時のみに女性の体の変化の教育を受けるのみです。そのため、女性の一生を通しての体の変化を知る機会が少ない状況です。特に、更年期以降の女性の体の変化についての知識はテレビ、雑誌、インターネットの情報から得ることはできるが正しい知識を得ている女性は少ないです。

また、最近では女性の社会進出がめざましく生活習慣の乱れや仕事にまつわるストレスも多く、その上に更年期世代は自身の抱える家族のことなども原因となり、ホルモンバランスが崩れ自立神経失調症状が出現し体調不良をもたらしやすい状況です。このように様々な身体変化が生じている更年期女性の健康を考えていく1つとして、更年期症状が更年期の捉え方や環境に影響されているかについて研究しています。さらに、更年期女性に対しては女性ホルモンに関する知識の提供を行い、更年期の捉え方に考慮した健康教育の方法の開発を検討しています。健康教育では、自律神経の安定をもたらすために自宅で手軽にできるリラクゼーション方法を取り入れるようにしています。



アピールポイント

小鹿キャンパス内で女性健康相談室を月に1回開催し、最近では奇数月に更年期女性を対象としたプチ講座を取り入れた座談会を行っています。ご希望の方は、ご連絡ください。

① 先天性疾患をもつ子ども・医療的ケアの必要な子どもの家族支援に関する研究

② 包括的性教育の実践

看護学科(母性看護学)
看護学研究科(助産学)

なが や かず み
長屋 和美

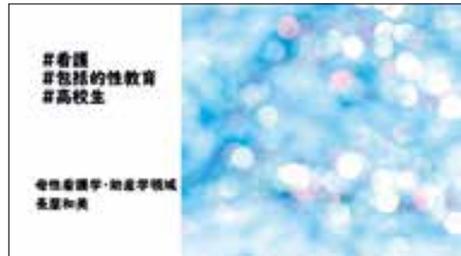
●連絡先 TEL: 054-202-2914
E-Mail: nagaya_kazumi@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード 先天性疾患、医療的ケア児、出生前診断、子育て支援、
包括的性教育



①健やか親子 21（第二次）では、すべての子どもが健やかに育つ社会を目標に、切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策や子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくりが基盤課題とされています。このような母子保健関連施策は、先天性疾患をもつ子どもや医療的ケアの必要な子どもも対象であり、親やきょうだいに対する社会的な支援も重要な課題となっています。助産師・看護師の立場から、家族に対するケアを充実させるための研究や、地域システムの構築に向けた調査を行うことを考えています。

②近年、若い世代において包括的性教育への関心が高まっています。包括的性教育は、乳幼児期から全ての人を対象とし、日常生活のあらゆる場面で行うことができます。当領域では、教員と学生が共同し、地域における包括的性教育の実践を行っています。



**アピール
ポイント**

地域における包括的性教育の実践の具体的な内容については、本メールアドレスまでお問い合わせください。

コミュニティの多様性に対応する地域診断と公衆衛生看護



看護学科(公衆衛生看護学)

いとう じゅんこ
伊藤 純子

- 連絡先 E-Mail : junkoito@u-shizuoka-ken.ac.jp
- ホームページ <https://www.omoken-works.com/>

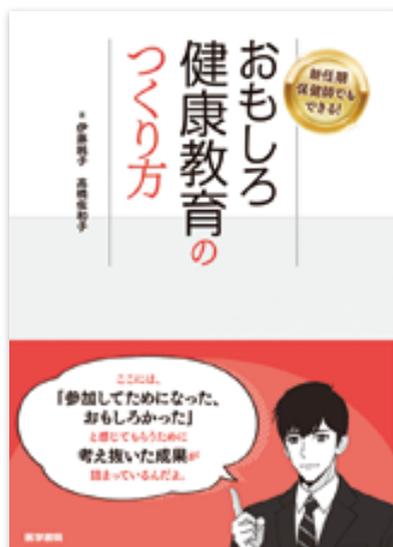
キーワード

地域診断、コミュニティ・アセスメント、ニュータウン、健康教育、ヘルスコミュニケーション



主にニュータウンやタワーマンションなどの都市開発地域を対象に、公衆衛生看護における地域診断の在り方を研究しています。地域社会の多様化が進む中、従来の行政区分を基にした地域診断の方法では、住民の生活実態を十分に反映できないケースが増えています。そこで、保健師が地域診断を行う際のエリア設定を中心に、より柔軟で実態に即した診断手法の確立を目指しています。特に、住民の互助ネットワークやソーシャルキャピタルの形成を通じて、地域全体の健康増進を促す仕組みづくりに取り組んでいます。

その一環として、健康教育やワークショップを通じた住民参加型の取り組みを推進し、実践しています。こうした活動を体系化し、「おもしろ健康教育」として特に初学者や新任期の専門職向けにわかりやすく示し、より多くの人々に伝わる形で発信しています。また、保健医療福祉の専門職向けの研修や教材開発にも力を入れています。研究と実践の両面から、変化する地域社会に適応した地域診断の方法と公衆衛生看護のあり方を探求しています。



アピールポイント

医学書院刊『新任期保健師でもできる！おもしろ健康教育のつくり方』を執筆。「おもしろ健康教育」を若手保健師の成長ストーリーを通じて解説し、健康教育をわかりやすく楽しく実践できるようサポートする一冊です。

エコーを用いた嚥下スクリーニング法に関する研究

の つ み か こ
看護学科 (老年看護学) 野津 美香子

● 連絡先 TEL : 054-202-2946
E-Mail : notsu.m@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

エコー、嚥下、スクリーニング



誤嚥性肺炎は死因順位第 6 位であり高齢化に伴い今後も患者の増加が予想されます。このため、誤嚥を防ぐために早い段階での嚥下機能を正確に評価するスクリーニング方法の開発は喫緊の課題であると考えます。嚥下評価は、特別な器具を必要とせずベッドサイドで評価をするスクリーニングと嚥下の様子を X 線や内視鏡を用いた画像を基に診断する方法がありますが、前者は、画像を用いないため客観性に乏しく、後者は検査場所の制限や痛みや被爆といった侵襲を伴い、医師の指示が必要な検査です。

エコーは看護師を含む様々な職種で使用可能な画像診断装置であり、非侵襲的かつ簡便に画像を得ることが可能です。またモードを併用する事により嚥下時の組織や食物の動きや速度等を観察でき数値化し評価する事ができます。

さらにエコーは、小型化が進み今や携帯可能となり、病院に限らず高齢者施設や在宅での活用が期待されます。エコーを用いた新たな嚥下スクリーニング法の確立は、高齢者の誤嚥性肺炎の予防や減少につながると考えます。

エコーを用いて嚥下時の頸部や食物の動きを定量的に評価することで新たな嚥下スクリーニング法の基盤を構築したいと考えています。

アピールポイント

高齢者の嚥下機能評価に基づく実践的なスクリーニング法の確立を目指しています。

がん療養者とその家族への支援に関する研究

看護学科（成人看護学） **は せ べ み き**
長谷部 美紀

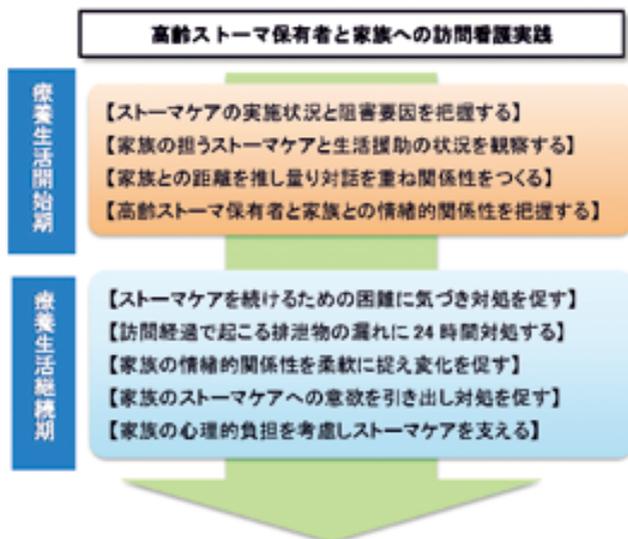
● 連絡先 TEL：054-202-2942
 E-Mail：m.hasebe@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

がん, 療養生活, 家族支援



悪性新生物（以下がん）は日本人の2人にひとりが罹患する病気です。がんの罹患率は年齢とともに上昇し、治療として手術を受ける高齢者が増えています。加齢とともに身体機能や認知機能が低下している高齢者の多くは、術後の回復過程で援助を必要とします。なかでも大腸がんで人工肛門（以下ストーマ）を造設した高齢者は、ストーマケアをするためにさまざまな困難を抱えています。自分でストーマケアができない時は家族の支援が必要ですが、家族も身体的・心理的・社会的な負担を抱えています。そこでストーマ造設後的高齢者とその家族が、生活へ順応していく過程における訪問看護師の支援に関する研究に取り組み、看護実践への示唆を得ました。現在は、壮年期のがん療養者とその家族への支援に関する研究に取り組んでいます。



長谷部美紀, 富安真理：高齢ストーマ保有者とその家族の療養生活への順応過程を支える訪問看護実践. 日本在宅ケア学会誌, 26(1):111-119 (2022) より著者作成

アピールポイント

がん療養者とその家族への支援に関する研究に取り組んでいます。

脳血管疾患患者・家族介護者の早期在宅移行支援に関する研究

看護学科（成人看護学）
看護学研究科（成人看護学）

はやし
こ
林 みよ子

●連絡先 E-Mail : m.hayashi@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

脳血管疾患, 家族介護者, 在宅移行支援, 早期介入

脳血管疾患は、突然に発症して麻痺などの機能障害を残す病気です。機能を回復するためには長期的なリハビリテーションが必要ですが、近年の病院の急性期化や在宅移行推進という国家施策により、こういった方の入院期間もかなり短く、入院後早い時期から退院に向けた準備が開始されます。

しかし、突如後遺症を患った患者もその家族も、まず変化した状態や状況を受け入れなければならないという苦悩に直面する中で、患者は日常生活行動の自立のための訓練、家族は介護スキルの獲得や自宅環境の整備、サポートの体制づくりなどに取り組まなければならない、在宅療養に向けた準備にはかなり時間がかかります。そこで、脳血管疾患患者とその家族の望む生活を実現するために、発症後早期から行う必要のある効果的な看護援助について研究しています。

アピールポイント

脳血管疾患患者とその家族の人生を支える看護の実現に取り組んでいます。

周産期防災と事業継続計画

看護学科（母性看護学）
看護学研究科（助産学）

ふくしま きょうこ
福島 恭子

●連絡先 TEL：054-202-2912

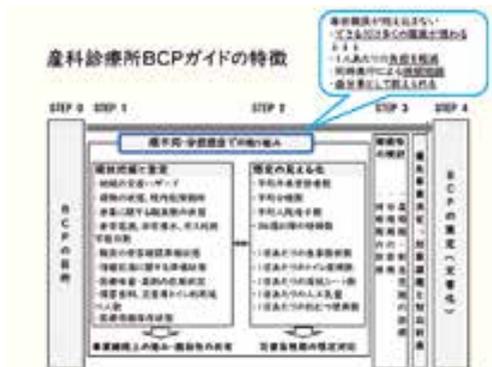
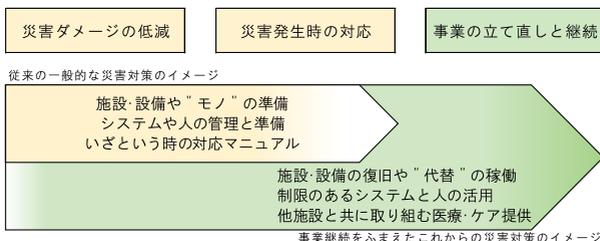
キーワード

周産期防災、事業継続計画、助産師教育、社会教育、
院内助産システム、看護管理、医療安全



安心して子どもを産み育てられる環境の整備は、少子高齢社会において継続的に取り組むべき課題のひとつです。母子ケアの専門家である助産師の育成、新しい家族のスタートとなる病院・診療所等・助産所等における安全対策の拡充、あるいは出産・育児の主役となる女性とその家族のエンパワメントなど多様な視点から、安心安全な出産環境整備のための基盤づくりに関する教育・研究活動を行っています。

自然災害発生リスクが高まる中、災害時の妊産婦・乳児への医療・ケア提供への備えについて検討することは、地域周産期医療の課題となっています。特に、日本の年間総出生の約半数を担う診療所・助産所の事業継続をふまえた災害対策整備・促進は、地域の母子の生命に直結する重要なテーマであるといえます。



アピールポイント

災害発生時にも妊産婦・乳児へのケアを途絶させないよう、地域で母子を支える産科診療所・助産所の事業継続計画（＝BCP）をふまえた災害対策推進に取り組みたいと考えております。

ドメスティック・バイオレンス（DV）及び子ども虐待と被害を受けた母子の回復支援に関する研究



看護学科（母性看護学）
看護学研究科（助産学）

ふじた けいこ
藤田 景子

●連絡先 TEL：054-202-2911

キーワード ドメスティック・バイオレンス，デートDV，子ども虐待，性暴力被害者支援，子育て支援，女性の健康，助産外来，院内助産

ドメスティック・バイオレンス(DV)とは…身体的な暴力に限らず、馬鹿にされる、無視されるといった精神的な暴力、友人や知人との付き合いを制限されるといった社会的暴力などの暴力を用いて、相手をコントロールすることを言います(パワーアンドコントロール)。

【研究着手の背景】

1. DVによる女性への影響：身体的な暴力による怪我にとどまらず、高血圧や糖尿病、心臓血管系の身体的健康障害、睡眠障害や不安、うつ病といった精神的健康障害と関連しています。(Wathen & Macmillan, 2013; WHO, 2013)。
2. DVによる子どもへの影響：子どもの問題行動、多動、不安、学習困難などの比率が著しく高いことが明らかになっています。(Levendosky, Bogat, & Martinez-Torteya, 2013)。また、DVは、子ども虐待にあたり(子ども虐待防止法)、DVのある家庭では、子どもへの虐待発生を70%増加させます(Tajima, 2000)。
3. DVの世代間連鎖という大きな社会問題が潜在化しています。(Fredland, McFarlane, Symes and so on., 2016)。

【研究テーマ】

- 1) 思春期からのDV予防啓発(中学・高校におけるデートDV予防教育)に関する研究
- 2) 妊娠～子育て期におけるDV被害者支援のための早期発見支援システムの構築に関する研究
- 3) DV被害を受けた母子の回復を促すプログラムの開発
- 4) 性暴力被害者支援看護師(SANE)の育成および他職種連携支援システム(SART)の構築に関する研究
- 5) 院内助産システム(助産外来・院内助産)の標準化に関する研究



アピールポイント

暴力を受けている女性や子ども等、いかなる状況にある母子が支援を求めやすい助産師、看護師のケアや支援方法の検討、母子の心身の回復を促すケアシステムを構築する研究に取り組んでいきたいと思っています。

外来における循環器疾患の患者に対する看護実践に関する研究

看護学科（成人看護学）

ほし ゆ き
星 有紀

●連絡先 TEL：054-264-5496
E-Mail：yhoshi@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

外来看護，外来患者，看護実践

外来看護に関する問題や課題について研究を行っています。

医療技術の進歩により、入院期間は減少し続けています。さらに、以前は入院を要した高度な医療も外来で行えるようになりました。特に、循環器疾患における心臓カテーテル治療をはじめとした低侵襲治療の進歩は著しく、日帰りでの治療を可能にしました。入院して行われていたケアが外来に移行したことにより、患者さんは自分自身で症状を管理する必要があります。患者さんにとって自己管理をするということは容易ではありません。

今後ますます、外来が担う機能はさらに多様化・高度化が進み、患者さんへの継続的なサポートの提供が求められます。外来機能の拡大により、外来看護師に求められる役割は多岐に渡り、看護が担う役割が重要視されている現在、問題や課題について一つずつ丁寧に検討し、外来看護に貢献できる取り組みを続けていきたいと考えています。

アピールポイント

外来での看護師経験を経て、外来看護に関する研究を行っています。

精神科看護師の患者に対する怒りに関する研究



看護学科(精神看護学)

こいずみ ゆう き
小泉 祐貴

●連絡先 TEL : 054-202-2674
E-Mail : koizumi.y@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

精神科看護、怒り、アンガーマネジメント、コーピング



精神科医療の現場において、残念なことに看護職者から患者への虐待や暴力が取り沙汰されることが少なくありません。厚生労働省が実施した調査によれば、精神科医療現場における患者への虐待例は 2019 年までの 5 年間で 72 件みられており著しく他科と比較して多い状況です。この背景には精神科特例（精神科病棟では一般病棟よりも医師や看護師の配置基準が緩和されている）による看護人員の配置の少なさ、病棟が密閉空間であること、患者が訴えにくい症状を有しているなどが挙げられます。特に、看護職者の患者に対する『怒り』の感情は、暴力と深く関係しており、厚生労働省は看護職者の患暴力防止及び、怒りの対処スキルを高める取り組みとして、アンガーマネジメントを示しています。精神科医療の現場では、看護職者は日々大きなストレスや負担にさらされています。体系的なアンガーマネジメントの導入は、看護職者自身のメンタルヘルスの維持に寄与するとともに、患者に対するより質の高いケアの提供にもつながります。そこで、精神科の看護職者が患者に対して抱く怒りの内容と認識にどのような特徴があるのか、また現場に即したアンガーマネジメントプログラムのニーズや課題を明らかにしていきます。

アピールポイント

精神科医療現場の看護師と診療情報管理士を経験しています。医療現場を中と外、両方から見た経験から、医療従事者（援助職者）の援助（心身のケアやサポート）の重要性を感じ研究に取り組んでいます。

同じ地域に暮らす外国人と人々と共に外国人の健康や死に纏わる様々な問題を解決する方法を見出す研究

まえのまゆみ

前野 真由美

看護学科 (成人看護学)

- 連絡先 TEL : 054-202-2678 FAX : 054-202-2678
E-Mail : maeno@u-shizuoka-ken.ac.jp
- ホームページ <https://medforesi.jp>

キーワード

在住外国人、腰痛予防教室、健康チェック表、
終末期ケア、お話しボランティア、医療通訳、地域づくり



日本で働き、老いて、死を迎える外国人が増えています。地域に暮らす外国人と人々と一緒に、外国人の健康に関する研究を始めてから約20年になります。外国人、医療関係者、医療通訳者、外国人支援者と共に、外国人の健康や死に関する課題を話し合うワークショップは、10回以上になります。調査や話し合いを経て、開発した冊子は、①外国人のための腰痛予防教室 (4か国語版)、② - 新型コロナウイルス感染症拡大防止対策 - 9言語の健康チェック表、③7言語 在住外国人の終末期 (もしものとき、エンディング) ケア「みせてお話し」ノートの3つです。外国人を対象に行った終末期ケアに関する調査では、ケアとして「祈り」を思い浮かべる方が多くいました。今後も、地域に暮らす外国人と人々と共に外国人の健康や死に関する研究を進めます。



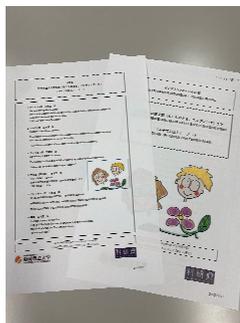
前野真由美他：外国人のための腰痛予防教室 (4か国語版)，2014。



COC「医療通訳の入り口としてお話しボランティア」第2回ワークショップ，2018。



前野真由美他：- 新型コロナウイルス感染症拡大防止対策 - 9言語の健康チェック表，2023。



前野真由美他：7言語 在住外国人の終末期 (もしものとき、エンディング) ケア「みせてお話し」ノート，2023。

アピールポイント

本学 HP に掲載されています。

①9言語の健康チェック表，2023。



①7言語 終末期ケア

「みせてお話し」ノート，2023。



子どもの意思決定支援や看護師の道徳的苦悩に関する研究



看護学科（小児看護学）

まる やま とみ み

丸山 始美

●連絡先

TEL：054-202-2915

E-Mail：maruyama@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

小児がん、看護師、意思決定、道徳的苦悩、道徳的レジリエンス、ターミナル期、ナラティブ、アドバンスケアプランニング



小児看護の医療現場で、子どもの意思決定支援の現状に苦悩を感じていました。そこで、看護師の意思決定支援や道徳的苦悩、看護師のレジリエンスの研究活動を行っています。

小児医療現場では、治療決定権は親権者である家族に委ねられることが多く、成長発達過程にある子どもを含めて意思決定することが難しい場合があります。看護師は、子どもの意思を尊重したいと考えていても、子どもがターミナル期の場合は子どもの意向が不明瞭であるため、子どもの意向を尊重することは難しいと感じています。看護師はそのような道徳的苦悩を抱きやすく、精神的な疲弊を感じたり、離職につながる危険性は高いと言われています。

そこで、看護師がより良い看護を実践するには、辛く苦しい状況から回復する力（道徳的レジリエンス）を持つ必要があると考えています。

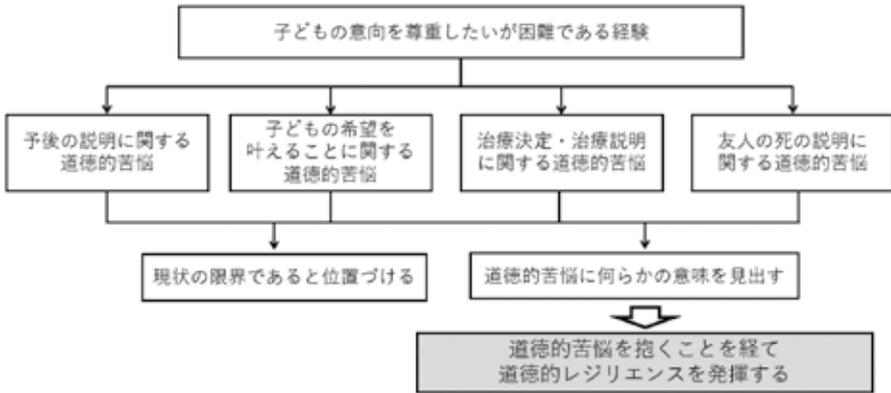


図1 道徳的苦悩を抱く看護師の概念図

アピールポイント

小児医療現場の看護師経験を経て、臨床で感じた倫理的な疑問や課題に関する研究に取り組んでいます。